新たな時代の航海士たちを追いかけるマガジン
ボイジャーズ

スカラシップヤード×学校法人湘南学園

VOYAGERS

#Shonan-gakuen

No.01 2017.8

2017年夏、学校法人湘南学園（神奈川県藤沢市）で、新たな挑戦が始まった。
生徒が社会課題にアプローチするプロジェクトを主軸に、共感を集めて活動資金と奨学金を調達する。
その過程で、生徒は「自分を駆り立てる問い」が何かを見つめ、仲間と協働し、時に葛藤し、未だ見ぬ誰かのところまで共感を生み出して、プロジェクトライフサイクルの一連を経験する。
今号では、その導入背景や取り組みの過程を追う。

SCHOLARSHIPYARD™
https://scholarshipyard.com

良い社会を一緒につくる仲間として、
教員も、生徒と共に学び合いたい。

2017年(平成29年)度よりスタートした、湘南学園中学校高等学校（神奈川県藤沢市）における、スカラシップヤードを活用した新たな挑戦をご紹介します。今号では、湘南学園教員およびESD*推進委員会の山田美奈都さんへ、港屋の五島からのインタビュー形式でお届けします。　*ESD=Education for Sustainable Development

＜取り組み校情報＞

学校法人湘南学園 中学校高等学校

住所：神奈川県藤沢市鵠沼松が岡４丁目１－３２
電話番号：0466-23-6611(代)
Web： http://www.shogak.ac.jp/highschool/
理事長：河野重男／校長：榎本勝己
ユネスコスクール
SGH(スーパーグローバルハイスクール)アソシエイト校
本件ご担当窓口：ESD推進委員会

■ 新たな挑戦の背景にある問題意識
ー 閉じられた世界から、外へ。

五島：そもそも貴校には、教育活動についてどのような問題意識がありましたか？
山田：「教育が校内で閉じられている」ことです。生徒の半数が小学校から湘南学園に通っていますが、高３くらいから「外に出るのが怖い」「ゼロから友達作れるかな」という声が聞こえてきて…本来、外の世界に出ることは、自分が広がり楽しいこと。そこにわくわくできない原因はどこにあるのかをずっと考えており、生徒も教員も内に閉じているからではないかと思うようになりました。私自身も学校の外とつながるほどに、自分の願いや目指したい教育像に出会えました。色んなものと出会い、軸ができていく。子どもたちにもそういう感覚を味わって欲しいのです。

五島：差し支えなければ、その願いとは？
山田：子どもたちにも伝えていますが、私はみんなと一緒に、社会を良くする仲間になりたいです。子どもたちには変化を楽しめる人間になって欲しい。そして教員も、生徒と共に学び合いたいです。

ー 学校の外側にも伴走者がいる。

山田：また導入背景として、クラウドファンディングで支援者を募り実行するだけでなく、教員や子どもたちが「伴走者を得られる」こともありました。以前取り組んだプロジェクトでも、校内だけで教育していくことのもったいなさを感じていて…。そして、課題を見つけるだけでなく、その課題の解決に取り組む段階へのシフトチェンジもしたかった。そのため、湘南学園の教育内容に共感してくれて、それに伴走してくれる大人を探していました。スカラシップヤードは、コーチングを活かした授業サポートのみならず、社会で子どもたちのチャレンジを支援してくれる大人に出会えます。資金だけでなく、アドバイスなども得られるので。

■ スカラシップヤードを選んだ理由
ー 願いを持って生きる大人と出会えること。

五島：恐縮ながら、スカラシップヤードを選んでいただいた決め手は何でしたか？
山田：一番の理由は、生徒と港屋の人を会わせたいということでした。生徒にとって身近な大人は先生か保護者。魅力的な大人や願いを持って生きる大人と出会うことの価値を感じて欲しい。人と出会って感じることはとても多い。教員もそうですが「自分たちにも何かできるんじゃないか？」と思えるような大人に出会って欲しいです。

ー「いわゆるクラウドファンディング」ではないこと。

山田：またスカラシップヤードは、授業を一緒に作れることや、プロジェクト公開の前後にも様々なサポートがあります。学校がサイトの管理者になれるので、クラウドファンディングの手数料分を学校の奨学金にまわすこともできますしね。

学校法人湘南学園　山田美奈都先生

「失敗したらどうしよう」から、
「成功したらおもしろいよね」に変わるとき。

■ 新たな挑戦ゆえの障壁
ー 忙しい。忙しい。忙しい？

五島：挑戦にあたって、校内ではどんな葛藤や議論がありましたか？
山田：多かったのは「忙しくなるんじゃないか？」「新しいことを始める余裕なんてない」という声。意味がないことではないとわかっているし、時代の流れもわかっている。子どもたちが社会と触れ合う機会も必要だとわかっている。それでも、忙しさを訴える声は多かったです。実際に始めてみて、忙しくなくなったというのは嘘になります。でも、一人で悩まなくて良くなったり、港屋には教員や生徒と伴走していただけたり、校外に多くの仲間を得ることができたりしました。
実務の量は、減りませんよね（笑）

ー 失敗への恐怖心。

山田：もう一つ、「（クラウドファンディングで資金が）集まらなかったらどうするの？」「失敗したらどうするの？」という心配の声もよくあがっていました。ここでは、港屋からのアドバイスを受け、教員全体で「この取り組みの成功は何か？失敗は何か？」を言語化し、共有することで乗り越えることができました。

五島：最終的には、どのような「成功と失敗の基準」ができあがりましたか？
山田：子どもたちが「プロジェクトをやるのって楽しいかも！」と思えたら成功です。みんなと一緒だったらチャレンジできる、チャレンジはおもしろい！というような。反対に「誰か一人ががんばった」「先生がやった」「少人数だけで取り組み、他が取り残された」状態は失敗。これらの言語化によって先生方が「まずはやってみようか」となりました。今までのプロジェクトにプラスαを付けただけ。少しでも成功したら、きっとおもしろい！

■ 授業・プロジェクトの裏側
ー プロジェクト創出の過程

五島：今年度の取り組みにはどのようなものがありましたか？
山田：今年度、中２は湘南地域の「不（不満、不安など）」を見つけ出すところから、高２は研修旅行先が決まったところから、何に取り組むかを考え始めました。この頃生徒にはまだクラウドファンディング導入のことは伏せていました。
「お金を集める」ことは目的ではなく「活動するには資金が必要だ」と、生徒から意見が出てくるのを待つためです。そのあと情報を開示し、港屋が担当する授業をスタートさせました。
話を伏せていた期間も、授業でどのようなことを扱うと良いか、港屋と相談しながら進めました。無事にプロジェクトが決まった後も、発信するためにどのように表現するべきか、文章等のブラッシュアップをしてもらいました。あるプロジェクトは、ほぼ書き直しに…（笑）
総合学園の特色を活かして、高２と中２の合同授業も行いました。というのも、高２はSDGs（国連の定める持続可能な開発目標のこと）を授業で学んでいたので、中２がその視点でプロジェクトに取り組めるよう、高２が授業を担当したのです。これは双方の学年にとって、意義あることだったと思います。人に伝えることは、最も学びが深まりますよね！

ー 目的は資金を集めることではない！

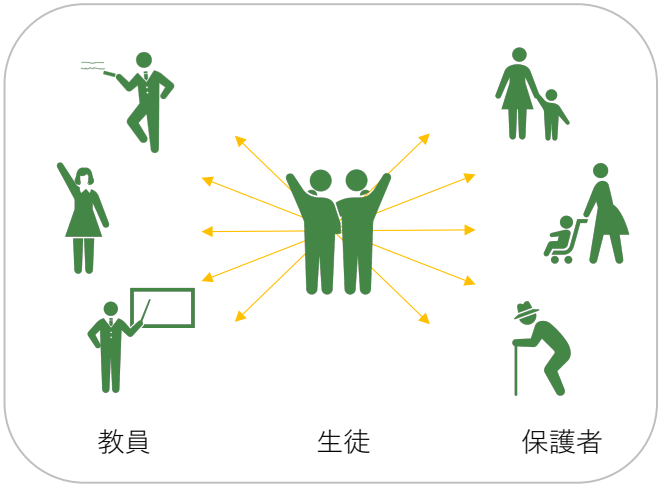
五島：中でもこだわりのあることは何ですか？
山田：目的がすり変わらないようにすることです。資金を集めることは目的ではなく、手段。自分たちの願いや思いを発信するための手段。目的は、自分たちがその課題にどう関わるべきか、自分たちの生き方とどう結びつくのかに向き合うこと。そこはブレずにいきたいです。

子どもたちを中心に、
放射状に広がりはじめた変化の波。

■ 現時点で起きている変化

ー 生徒：小さな「やってみたい」を起点に、「自己志向」から「他者志向」に矢印の向きが変わる。

五島：まだ始まって３ヶ月程ですが、現時点で感じる変化にはどんなものがありますか？
山田：生徒を主体的にさせることがこれまでは課題となっていました。総合学習も研修旅行も、初めは他人事に感じるところからのスタート。今回の仕組みでは、まず学び、自分のプロジェクトとひも付けていくと、知らずしらずに学んでしまうようになっています。その過程では、プロジェクトテーマに関連する出来事や気付きを、生徒が「こんなことがあったよ！」とクラスに持ち込んでくるようになりました。自分で見つけてくる。すごく主体的です！プロジェクトを多くの人に知ってもらうために、みんなで街にチラシを持ってでかけたときも、多くの生徒が参加しました。生徒同士が、互いの得手不得手や特徴を補い合い、みんなで大汗をかきながら、がんばっています。
授業では「海が汚いのは問題→湘南の海は汚くないよ！→なぜ？→毎日清掃してくれる人たちがいるからだ！→この間出かけた別の海の方が汚かった→海はつながっているのに、自分たちの所だけ綺麗ならいいの？→どうやら見えるごみだけでなく、小さなプラスチックごみが海にスープのようにたくさんあるんだって→もっと根本的な解決策は…？」そんなふうに、一つの問いや気付き、やりたいことから広がりが生まれています。達成したい目標があるから、工夫する楽しみがあるのです。



ー 保護者：一生懸命な子どもたちの応援団に。

山田：それから、保護者の反応にもびっくりしました。保護者面談で、こんなに総合学習の話が出るのは初めて！ご自宅でも、生徒が自分のプロジェクトの進捗がどうか、マメに気にかけている様子を見て、親として「応援したい！」という気持ちがわいてきたようです。その保護者たちがアドバイスをくれたり、時に学校に海の汚染についてレクチャーしに来てくれたり、本を貸してくれたり、アプローチ先を教えてくれたりと、こんなにも応援いただき、協力してくれる機会になるんだ！と驚きました。
子どもたちが一生懸命に取り組み、夢中になっていると、その姿を見た大人が協力してくれる。今までにはない出来事でした。

ー 先生：正解のない世界への挑戦！

五島：私からは、先生方にも大きな変化があったように見えましたが、実際はいかがですか？
山田：はい、教員も「つい学んで」しまっています。学ばざるを得ない。今までルーティンになりがちだった総合学習が、マニュアルのないプロジェクトになり、都度起きた出来事を学びに変え、更新するようになりました。
ルーティンならば一人でできますが、初めてこんなに、各クラスの担任と進捗を話し合っています。大人になって、教員になって、こんなにチャレンジする日がくるとは！（笑）

ー 「生徒の挑戦を支援する文化」の醸成。

山田：これまで生徒には「失敗したらどうするか？」を考える機会がありませんでした。今回、もし資金が集まらなかったら、どこを削って実行できるようにするか、事前に検討しています。削っていき最後に残るのが、本当に大切にしたいこと。もしだめだったら、そこから学べばいい。「ふつうの総合学習」では「失敗」がわかりづらいですが、これは失敗可能性のあるプロジェクトです！

■ 今後への期待

ー 批判を恐れず挑戦し、自分のアイデアに外部からのフィードバックを得られる喜びを！

五島：最後に、今後に向けて期待していることを聞かせてください。
山田：子どもたちの「やりたい」が溢れすぎて、教員側が困ることです！「そんなに顧問につけないよ～」となるくらい。子どもたちが「あれをやってみたい」「これをやってみたい」を発信できる場所になること。批判を恐れず、アイデアを発信し、外部の方にブラッシュアップしてもらう快感を知ってほしい（笑）フィードバックをもらうのは勇気がいるし怖いなと思ってしまうけれど、そこにある楽しさの側面を感じて欲しいです！

（取材：2017年8月1日　湘南学園にて）

スカラシップヤードのしくみ

「スカラシップヤードTM」は、港屋が開発した”Learning by Doing”を基本理念とした教育活動支援×ファンドレイジングのサービスです。この構造を用いて「未来を拓くリーダーを輩出するエコシステム」をつくります。

▼ スカラシップヤードjourney

学校ごとにカスタマイズしながら、授業や課外活動と組み合わせて、
教育効果の高いプロジェクトライフサイクルを、約１年かけてまわしていきます。

■学校ごとの専用サイト
学校名を冠した
クラウドファンディング
サイトを貸出

■授業／任意プロジェクト
生徒が身近なものから自分の
関心があるテーマを模索し、
プロジェクトを考える

■強みや特徴の可視化
事前ルーブリックレポートで、
自分や仲間の強みを知る

■アイデアのプロジェクト化
港屋×プロジェクト顧問（教員）
によるプロジェクトの
ブラッシュアップ

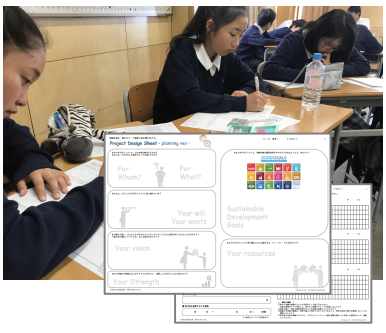
■プロジェクト公開／実行
プロジェクトをサイトにUP！
アナリティクス機能などを
使いながら、活動開始

■活動資金、外部の仲間を得る
プロジェクトに共感した寄付者から
アドバイスと資金が集まる
（クラウドファンディング All in／寄付型）

■資金の循環
集まった寄付の一部が
学校の奨学金、運営手数料となる

■成長の可視化
事後ルーブリック／ポートフォリオ
で振り返り、次のプロジェクトの
テーマを考える

▼ スカラシップヤードの特徴



■ ルーブリックレポート
・自己肯定感、強みの可視化
・他者と自分の強みを組み合わせる
・指標：プロジェクトライフ
サイクル、コンピテンシー

■ プロジェクトデザインシート
・プロジェクトを考えるための
問いかけ、検討すべき項目
・より多くの人にプロジェクト
を伝えるための表現を考える

■ アナリティクス機能
・サイトUP後にサポーター属性
やアクセス記録等のデータを
フィードバックとして、行動
変容を起こす

■ ポートフォリオ
・自分だけの成功／失敗指標
・学び深化のための言語化

■ 授業デザイン、授業担当
・先生と協働しながらコーチング
を用いた授業等を設計

■ 奨学金を学校みずから創出
・資金の一部が奨学金として
学校法人に分配される

SCHOLAR™
SHIPYARD

No.01

2017.8

【発行】**港屋株式会社　Minatoya Inc.**
〒227-0054 神奈川県横浜市青葉区しらとり台１－７ヴァンテアンビル４F
WEB： https://www.minatoya-jpn.com/（港屋株式会社）
https://scholarshipyard.com/（スカラシップヤード）
MAIL： ssy@minatoya-jpn.com

Copyright © Minatoya Inc. All Rights Reserved.